
兵士不純11 20

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兵士不純 11 20

【Nコード】

N1958L

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

兵士不純 続き 11から20

人が集まり出す。最初と最後は手に入れあとは中盤を征する必要があるのだが。

兵士不純

1 1 ^ 2 0

1 1

少量の食事とひたすら今日を生き眠る。繰り返す。先は見えないがそれを当たり前と思う。変化を期待するようで、日々平和を願う。繰り返し繰り返し間に、考えるだけになり行動に移せない。思いは無限に拡がりそれゆえに思い自体に満足する。

あいかわらず思うのは、世の中を動かしているのはテレビで、世の中の仕事はテレビを作っている人が半分でもう半分がテレビのネタをしらずしらずつくっているのだろう。

テレビを見ているだけで満足だ。

無料のテレビを見ているだけで満足だ。

ぼくは国に感謝をし、満足する。

冬の寒さや夏の馬鹿暑さに比べれば安定している。

風がいくら吹いてもびくもしない家に住み、飢えて死にはしない。運動不足を感じて自ら体を痛めつけたり、おいしいお酒を飲み過ぎたり、世界に挑戦してみる気になったり、パチンコ屋で負けたり勝ったり、余興を楽しんでいる。

1 2

私が夢を見るとは思いもよらなかった。

ねずみ、ねこ、さる、へび、うさぎ、とり。毎明け方、動物たちが私を迎えてくれた。

彼を見つけたはずだった。接触できぬまま見失った。

誰がやったかは知らないが折りたたまれた絨毯を開いてみる、淋しくてたまらないから。開いていくが、途中で気付いて元に戻そうとする、すべて開く前に、收拾がつかなくなるんだ。だから折ってあるんだとき。淋しくてそれが拡大していくなんて耐えられなくて元に戻すんだ。その状態。だから絨毯は折りたたまれてあり、一度は開かれすべて開かれることはなく元に戻る。いつまでも探しているのが好きなのかもしれない。見つけるのが、ただそうだと自分で思うだけと知っているから。まずいそばやに出会って終わる。店の名は勝負。地下の飲食街を迷って迷って店に入る。入って注文を頼む品がなかなか決まらない。これといったものがない。そばやだからしようないがなかなか注文できず近くの客が食べている一番安いのを注文する。案の定まずく、食べ終わりすぐに店を出た。

13

私は月とともにある。

月が私を見ている。

気配を感じて振り向くと、うなだれた後叫びたいつもりで上を見上げると、ああそうだろうと感じるとそこに月はある。

あの山でもそうだった。

私は月とともに彼が薄くなり山とともになるのを目撃した。私は追いつけなかった。私は月にいつまでも照らし出されたが彼は違った。私は山と私と月の3つだけを感じた。飲み込んで目を閉じた。やがて息を吸い吐くと目の前に男が現れた。

さまようものよお前は一番ひどい。ひどい有様だ。山に来て海を思い、海へ行き山を恋す。お前はお前を思うが、お前すらお前でないのだ。

彼は、とようやく私が訪ねるのだが、彼を捜してなにをする、彼に会うことはかなわぬだろうというのだった。

私は確かに彼を見たところでみたというのだが、彼はそうではないという。

お前はなにものだ。山か、彼か、空気か。

私にはお前の存在を消すことができる。お前を見失うことができる。私には、私には、男は呪文のように繰り返して私は立っているのかすらわからず霧のように消えてゆきそうになるのを感じた。

彼もそうなのだろうか、彼も男にそうされてしまったのだろうか。

私は恐怖を感じた。しかし感じる体の感覚すら見失っていた。

何もかも終わる。終わっていく。そう感じた。これが死かと思った。ここで死ぬのかとただぼんやりと感じていたが、私にはやはり月がたよりだった。月の光が移動してきてそのものの方へかかってきたのだった。それにより彼は姿を消し、声をなくし私のもとから去っていった。

ただ後には月と私とがあり山は動かず霧は立たず、私は飛ぶように山を下りていった。

14

気持ちや感情って使い切ってしまうってことあると思う。

私がそうであると思う。

どこにもリンクしていないホームページがある。

私がそうであると思う。

封じられている感が強い。敵は誰だ。敵はいないのか。

私は今日をまた生きる。

敵をとりあえず目の前の敵を打ち倒す。私に敵はなく、私のチームにも敵はない。上へ上へ登り詰める。

ただ、この世界にもてあそばれているのにはかなわない。

今日またそれを感じた。しかしそれはわかっていること、最初に師に教えられなかったか。

暗闇にいれば安心する。耳栓をして無音ならなおさら。

ひとりで切り抜けるなんていずれ無理だ。

私はこの世界を破壊してやろうと管理者と戦うことを決意するしかなかった。

だがそれは愚かなことだった。強くなり上へ行けば行くほどそれはわかる。

計画を立てよう。

私は表向きは普段通り活躍した。

裏で初心者を装い一日数十分入り口の入り口でうろろする私を作成した。

15

久しぶりの外だった。

靴箱から靴を出す。着ていく服を選ぶのに半日はかかりそれは前日から用意する必要があつた。

最弱。

か細いからだ。脆弱な精神。財布はなく、ポケットのコイン。

私を世界に晒す。

最弱にて最強を。隙を突く。ウイルス。

ウイルス自体に意志はあるのか。意志はある。破壊、破壊、破壊。

どうすればいいとかないくてただ、感染させる。無力さを、あきらめを、無駄な努力を。

ウイルスは外に出るべきだ。

みな一斉に外に出てあきらめさせる。発展とか秩序とか継続とか努力とか無力にさせる。それは精神の爆弾だ。今に必要な爆弾だ。いつ、どこに落とすか、どこに流れ込むか。

しばらくすると薬が寄ってきて私は数十分の世界から自宅の安全圏に回避した。

私は最強に戻る。仲間を集める。きらびやかに着飾り世界を席卷する。仲間を集める。慎重に集める。中には管理者がおり、息のかかったものが数名いる。信頼できる仲間はどれくらいか、私はそれに苦心した。最強の私でもそれについては考えもしなかった。信頼できる仲間。大きくなればなるほど、強くなればなるほどひもがつく。誰と誰が繋がっている。師弟関係、義理。恩。気まずい関係。それらの相関図を描く。

本物を探し出す。

誰とも繋がっていない孤高の精神。

やがて私はそれに気を遣い気付いたのは、それらはすべて私の敵であつたし仇だつた。私は私の信頼できる仲間を次々と打ち破り彼らの敵となつていたのだつた。

私は一息をつき、外に出た。

最強と最弱の扉は厚くこの扉こそが今の壁だつた。私は開いたがそれを何人で開けるかだ。何人で同時に開き閉じられる可だ。それを繰り返せるかだ。

2。

私は数える。

これで2回目。

まだ私ひとり。

16

バランスを取ろうとしていた。頭の中に天秤をイメージした。右利きだったが時々左を意識して使ってみた。テレビの体操番組で体幹をいうものを学んだ。

毒も食べられるようになった。

薬、毒、薬、毒。毒毒毒。薬薬薬。忘れないことだ。何をどうして

きたか。

ゼロからスタートにぼくは満足していた。だから日記をつけて数をかぞえるようにしている。本日は1。

結果1。

ぼくにとって死はゼロ。生は1。

杜氏のいいちゃんの息子にしてみれば一笑にすぎないがわかりやすいのが気に入っている。

1。1。1。

それは日々を費やしても2にならず1が続く。

これが今の生活。

ぼくは日記をつけ計算し、時間を守るなら正午には56とか134とかあるいは9788とかになっても24時にはそれを1にする割り切れる数字や引き算をこなせるのだ。

やがて、慣れていくんだろうと思う。

生まれたての赤ん坊はみなこうしてるんだろうと思う。やがて慣れてきて飽きてきて、3日で1にするだとか、1週間で1にするとか考えて実行し達成できる。

やがて借金をしたり、貯金をするようになる。

そうしていくうちに、もうどうでもよくなるんだ。

どうでもよくなる。

前の自分に戻るだけだ。

前の自分はどうだったろう。思い出せない。

あまりに複雑に絡み合ってもうもとに戻せない。

どうでもよくなっていくからそうなんだ。

直そうとしても、次から次に毒も薬も流れ込み、收拾がつかないばかり。

それは避けるべきだ。それだけを避ける。

1は続いた。

17

自分を見失っていた。彼にあわせるために行った行為は間違いの元
と思われた。

田上俊。私は田上俊。自分を取り戻す。

落ち着く。

3日。3日あれば充分だ。機能は回復する。私という機能。田上俊
という人間。

そしてまたはじめよう。一回だ今回は一回で決める。

彼にあわせる必要はない。

範囲を決めて一発で決める。

18

どうしても必要だ。彼は信頼できる。あとはみな誤差をはらんでお
り最初がいいが続かない。長く続ける内に破綻をきたす。最初が肝
心だ。最初の大きな力、3分いや4分かどうしようか。押し倒す力、
てこの原理。勢いがつけばあとはなだれ込む、

最初の力、それから誤差の力、半分まで届けばあとはことは足る。

その後はどうする。核を逃がす。核を隠す。そして続ける。続ける
のは誤差の連中を扇動するだけでいい。

やがて気付くものがあるが、それまでに核を逃がす。核を守る。

その後は。

知らんぷりか。

どうするか。

それは意味があるのか、ただの復讐か。

後後々を考えて先へ進まないのをやめた。

それでいいのか。

最後を考えるべきだ。

逃げて、終わりか。

核を持ち出して守っていく、それで終わりか。

終わりにしよう。

大抵の問題はこうした結論にいたるのだろうか。

考えつかない。だから考えつくところでそこまで終わりにしよう。
後は、知らない。

しるもんか。

安全な所に逃げる。

終わる。

それで終わる。
ん。

今と同じではないか。

なぜ、そうなる。

なんでそうなるんだ。

なんだ。なんで。

どうして、。

動悸。

無駄。

動悸が無駄無駄無駄と息づいて聞こえる。

また、ここ。

ここに戻ることが目標。

最終。

終わり。

自己を証明する。

世界に対して自己を証明して、さんざんな嵐を破壊をまき散らして、
安全なところへ逃げ込む。

それがやること。やりたいこと。

正しいからだとか悪いことだからとかリスクをとるとか努力とか責
任とかそんなのを抜きにして根っからの願いだとすがりついたもの
がこれ。この計画。

感じない。鼓動がおさまる。何も感じない。無心になり彼に連絡を
とった。

山から帰還していなければ終わりだ。
終わりの終わりだ。

でもそうならないのを予感だけはしていた。

19

仕事だ。依頼だ。

昔からの知り合いで山へ登るアドバイスをもらった人だ。
そのころのぼくは100の数を匠に扱うことができるようになっていた。

時勢柄今やだれでも1000や10000の数字を得ることは可能だが管理するのは難しい。ぼくは100にこだわった。
自分には100までが丁度よい数字なのだ。

消化不良に陥る。錯覚を起こす。そして大きい数字は割と面倒くさい。なまけものの自分にはここまでだ。そう理解し100を使いこなすことに専念した。

だから、仕事の依頼があったときもその旨を説明した。
それでよければとぼくがいい。それでいいと答えがあった。
ある意味1があればいいのという答えだった。

1ですか、1がほしいですか。
じゃあ2をつくって待っています。

20

しばらくなっていない電話が鳴る。

もとの職場。

もう関わってはいない。

助言が欲しいというがトラブルの原因は私にもあるという。
私の理論がくずれたというのか。

あの娘まだこりずにいるのか。

田上はあきれた。

それに神のレベルだという。

もうあの世界は見たくないというのに後輩になきつかれた。

最初がオレの仕事なら最後も責任とれってか、さてどう始末をつけようか。

明日、午後出勤するから用意しておいてくれ。

それまでの連絡を頼む。それから向こうの概略と近況、ここ一週間のログのすべてを送ってくれ。

娘の名は、名は、名すら思い出せない。何年前だ、5年はたつ。驚きだ。5年も続けているのか。オレの教え通りに。オレの世界だったものを繰り返し繰り返し。

聖騎士として秩序を取り戻す。

箴言を理解するか否か。

資料に目を通す。一週間分のログは膨大で一日に20時間は活動している。世界という世界に張り巡らしている網の目。包囲網。ほぼすべてと繋がっている。万全という訳か。

万全の備えをして迎え撃つつもりか。

それもよい。

破綻という言葉教えてあげよう。

田上は神の声を伝えに世界に降臨する聖なる騎士。

行進曲について、凱旋曲について考えた。

その日は眠らず戦いに備えた。

本当にこいつは何をやっちゃってるんだろう。

たかが遊びではないのか、こちらは仕事だ。そして余分な仕事だ。

オレを出させるな。

オレは辞めたんだ。

私は気を取り直すと聖なる騎士として騎馬に乗り現場へ向かった。

私は、せっかく取りもどした私田上は、野蛮な戦いに終止符を打つために扉を開けた。

オレがやる。みなサポートを。そう言っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1958/>

兵士不純11 20

2011年1月9日04時37分発行